

国語の力その1

2024. 7. 25

人生の半分以上を国語の先生として生きてきた。直接、国語の授業を担当したのは、40代前半までの約20年である。その後も、国語の授業を参観したり、アドバイスをしたり、研究発表をしたり、講演をしたりと、ずっと国語と関わってきている。

実は、30代の後半を迎え、ようやく国語の授業の何たるかがわかってきた。わかったのはいいが、数年後には、国語の授業から離れた。それまでは、国語の授業をやってはいるが、何かが違うという違和感をずっと抱いていた。国語の何たるかや違和感のことがわかってきたのは、国語の授業をしなくなってからのことである。

そのわかってきたことを多くの人に伝えたいのだが、その術がない。限られている。そこで考えた。この紙面を使うという方法である。したがって、主に想定している読者は、幼稚園の保護者、小学校の保護者、幼稚園や小学校、中学校の先生方などである。文章は、保護者向けのものとしたい。その方がきっとわかりやすくなる。園長通信では、初めてのシリーズものとなる。

国語は、勉強しても仕方がない。もともとの力で決まる。そんなふうに思っている方はいないだろうか。仕方がないのではなく、どのように勉強したらわからないというのが現実なのではないか。本当の国語力は、練習を積み重ねれば着実に上がっていく。それは、レンガを積み上げていくようなものである。そこには、確かな安定感と手ごたえがある。レンガは、子どもが大人になってからもずっとその子どもを支え続ける。

一方、見せかけの国語力というものがあるとす。それは、ふにゃふにゃした豆腐を積み上げていくようなものである。不安定であり、その子どもの人生を支えていくものにはなり得ない。算数や数学には、計算方法や解法がある。同じように国語にも、書く方法、読む方法がある。この方法は、誰にでもできるとごくシンプルなものではなくてはならない。

一部の専門家や実践家は、以前からこの方法のようなものを説明し、実践もしてきた。だが、広まることはなかった。いまだにそうである。小学校にも中学校にも、受けても受けなくても、さほど変わらない国語の授業はないだろうか。一見すると、子どもたちは楽しそうである。しかし、何が身についたか、何ができるようになったのかがわからない国語の授業はないだろうか。若い頃の私の授業もそうだったに違いない。

国語の先生だから、国語の話をしているということもあるが、国語力がつけば、他教科も上がると考えている。本当の国語力は、他教科にも波及し、全体の学力を上げるのではないかと考えている。